

信州大学入学の頃

国鉄に勤めていた親父の転勤により、岐阜県立斐太高校から郡上高校へ転校した。異例でもあり、手続きなどに時間がかかったが転校することに。あとから考えると、転校してよかったと思う。高校2年春に、「斐高生」から「郡高生」に変わった。

中・高校時代も書きたいが、先に大学時代のことから始めよう。郡上高校は斐太高校に比べ、大学への進学の間は狭かった。国公立しか行かせてもらえないので、転校後はそれなりに頑張った。斐高時代に比べて、成績は「ぐん」と上がった。成績とともに、やる気もアップして、なんとか国公立を目指せるようになった。

当時は1期・2期という制度であり、2回のチャンス。理系はまったく苦手なので、受験しやすい大学として、1期は金沢大学法文学部、2期は信州大学人文学部を志望した。金沢はやはり実力的に厳しく、「桜散る」であった。金沢まで列車を共にした憧れのMさんは「合格」。激しく落ち込んだ。失意と風邪の中で信州大学を受験して、なんとか合格できた。創設2年目の人文学部経済学科である。なぜ、合格できたのか、いまだに不思議な思いがする。これで、のちの「人生」が方向づけられた。

1967（昭和42）年4月に松本の市民会館で入学式があった。いまでも覚えているが、医学部などの先輩の話聞いて、「すごい人がある」と思ったものだ。当時を思い出すために、図書館にあった『昭和の記録』信濃毎日新聞社、1989年をめくってみた。

昭和41年の「主な出来事」から — 敗戦後のベビーブームといわれた時代に生まれた子供たちは、41年～43年ごろにそろって18歳の大学入学年齢に達した。大学進学率もたかまり、長野県は全国平均を下回るとはいえ、35年に10%強だったのが40年には20%に近づいている。--- 信州大学では4月1日、新たに教養部が発足した。同月22日に松本市の市民会館で開いた入学式には、開学以来初めて全新生1225人が一堂に集まり式典が行われた。信大は典型的な“タコ足大学”で、総合大学としての一体感はうすかった。これまで一般教育は県下の3カ所で実施されていた。



このため、まず38年に当時の三村学長が、一般教育課程の松本市への統合を提唱。39年に信州大学将来検討委員会が設けられ、松本市に「教養部」を置く、文理学部を解体し「人文学部」と「理学部」を新設などの方向を打ち出していた。写真は信大教養部の看板掲示。懸案の一般教育課程の統合が実現とある。

今になって、信大入学当時の「大学事情」を再確認した。私の信大入学は翌年1967（昭和42）年である。松本での「青春時代」を思い起こしていきたい。

（2016年8月29日）